

1930—40年代の「ペギー主義」

— エクリチュールのポリティック —

有田英也

はじめに

政治と文学の関わりといえば、例えばプラトンによる詩人の共和国における地位の規定やヴォルテールによる『哲学書簡』の形式を借りた旧制度批判が想起されよう。これらの書物は誰もが知っており、誰にも利用できるという意味で古典である。論壇にデビューしようとする若い文学者達にとって、古典は彼等の愛読書となりうるとともに、彼等の思想表現にあたり、典拠、ないし一種の「後見人」の役目を果たす。小論で試みられるのは、19世紀末のフランス論壇に始まり、少なくともパリの市民社会全体を揺るがしたドレフュス事件の生んだ一冊の回想録が、後の世代の政治的にして独立歩歩の文学者達にどう読まれ、彼等の古典とされ、「相続」されたかの素描である⁽¹⁾。

もとより「読解」には、政治および文学の新しい文脈に古典を組み込む、狭義の「読解」のレヴェルと、それを実践に移す、広義の「読解」のレヴェルとがある。例えばマルクス文献の解釈学とマルクス主義運動との関係が、これらのレヴェルにそれぞれ対応するだろう。小論は第一のレヴェルに対応するフランス30年代の理論上の「ペギー主義」péguysmeを主として問題にする。ドイツのフランス占領下（1940—1944）に制度的に実行された「国民改革」が内包するもうひとつの「ペギー主義」については、第3章で対比のため、論争の次元および作家の政治的決断の次元とで扱われる。

したがって、実践に先立つ構想のレヴェルで、ペギーの著作の「読解」を機に、政治と文学がどのように相互浸透し、言葉がどれだけ幅をもって古典の読者に喚起されるか、が小論のテーマとなる。

1. シャルル・ペギーのミスティック

ペギーは『我等の青春』の中で、ドレフュス事件に関する最も有名な言葉のひとつ、「すべては神秘に始まり政治に終わる⁽²⁾。」を記している。この一文は、事件のもつ神秘的次元が政治的マキャベリズムに回収されてしまう事に警告を発したものだと解される。ミスティック（神秘ないし絶対的信頼）という語の選択そのものが示すように、

ペギーはこの次元への知性による介入を拒んでいる。この拒否は、政治への拒否ほどに明瞭ではないが、後述するようにペギー思想の独自性に基いている。すぐあとに「すべては神秘によって、ある神秘によって、その（固有の）神秘によって始まり、すべては政治的なるものによって終わる⁽³⁾。」と文章は続き、ペギーにおいて神秘に関わる事柄と政治に関わる事柄とが峻別されているのがわかる⁽⁴⁾。神秘はそのつど個別的に顕現し、人はそこに彼の信仰の基礎を見る。ところが個々の政治は可算名詞としての特殊性を離れて、どこか据え難い抽象的な通底性があり、その属性にペギーはむしろ注目しているようである⁽⁵⁾。しかしペギーは単なる厭世詩人ではない。彼にとっては現世の問題は少なくとも芸術的関心と同様に重要で、神霊的事象と物質的事象をつなぐ深い絆を証言するために現世の問題に身を投じた作家の一人だった。ペギーが事件の「ミスティック」としての側面を強調したのは、1910年出版当時のどのような知的状況に基いていたのだろうか。

フランス共和国は当時、国民教育の世俗化（1905年末に政教分離法が成立）に力を得て、国家諸制度の正統性を保証するイデオロギー的基礎を、もはやキリスト教には求めていなかった。従って行動するカトリックであり、宗教的信仰に基く共和主義者であるペギーの立場は1910年の読者にとって非難すべきものではないにしても、歓迎される筈はなかった。『我等の青春』の中で、自分達の仲間が、共和国のミスティックに疑いをさしはさまない世代と、それを軽蔑する世代の間で「不利な地歩」*mal situés*にあると言う時、ペギーは事態の正鵠を射ている。第一の世代にあっては、ミスティックは問題にならない。第二の世代にあってはそれは存在しないも同然である。ミスティックである以上、それは人間の言葉による表現を受けつけ難いのだが、ペギーの世代は、敢えて表現に踏み切らない限りミスティックの継承の不可能な「不利な地歩」にあったのである。ペギーによれば共和国のミスティックの最後の高揚であったドレフュス事件の熱狂が去ってしまえば、眼前には共和国を聖別したかもしれないものが緩慢に溶解してゆく様があった。民衆を丸めこもうと務める政治運動——ペギーによればジョレスのそれ——は顕著に進展しており⁽⁶⁾、そしてそれに伴い、進歩、人権、合理性を体現する共和国というイデオロギーが左翼知識人を中心に形成されつつあった。

ここでイデオロギーを、社会の諸事象を律し、制度に正統性を与える、体系化された思想と考えるならば、共和国というイデオロギーは次の三重の意味で捉えられよう。まず、議会や非宗教的公教育といった既存の政治諸制度の保証。次に、現実の政治を理想化して示す衣装。そして、変革に目標を与える「ユートピア」の機能である。共和国について人が考え、論じるたびに、人は共和国のイデオロギーのいずれかの水準に送付され、制度としての共和国を強化する。ところがペギーは「今日、共和国はひとつの命題 *thèse* になっている。」と批判する。彼にとってその命題の是非、あるいは留保は問題でない。問題なのは、共和国という体制が命題になり下がってしまい、考

える対象となり生きられる対象でなくなったことだ。ここにペギーの反知性主義的な国家へのアプローチが見られる。この反知性主義は、なるほどイデオロギーの持つ政治的欺瞞に満ちた正当化作用に有効に反応しはする。だが彼自身の「生きる」共和国を知性の手の届かないミスティックの次元、言わば信仰の次元に押し上げてしまう。このような見地からペギーは、共和国が彼の考えるようなドレフュス擁護派の介入からは何ら得るところがなかったと断じているのである。

『半月手帖』誌を1900年1月から主宰するペギーは非順応的な態度を貫き、政治運動の面で孤立を深めて行った⁽⁷⁾。だが回想録『我等の青春』の中にあるペギーの思想は、政治への拒否の姿勢を別としても、それだけでドレフュス事件の進展と顕著に対照的な異様な思想である。彼の主張する「ドレフュス事件のミスティック」の内容に耳を傾ける前に、事件の概要を示そう。

1894年12月にユダヤ人ドレフュス大尉が有罪宣告され、アンヴァリッド中庭で官位剥奪された後、いわゆる「ドレフュス事件」がゾラの介入をもって社会的規模を獲得するのは1898年1月の事である。「オーロール」紙の再審要求署名に、文学史家ランソンと並び、ペギーはいち早く名を連ねた。(1月16日)同年8月、ドレフュス有罪の証拠物件のひとつが参謀本部アンリ大佐の偽造であると判明し、大佐が自白の後自殺するに至って事件は政治問題化する。即ち軍への信頼を賭けて同年末には「フランス祖国同盟」la Ligue de la patrie française が結成され、モーリス・バレスが参加する。他方、「人権擁護同盟」la Ligue des Droits de l'homme には軍国主義への反発と共和制の保全を旗印に、穏健共和主義者から、これまでブルジョワジー内部の争いとして冷淡だった社会主義者(殊に、無政府主義色の少ないジョレス派)までが結集した。翌年まで続く街頭および大学構内での騒乱で問題とされたのは、両派の支持母体の名称が端的に示すように、国家主義、軍国主義、人権、共和制といった共和国のイデオロギーの根幹であり、明示されないものの、大衆動員の背景を成した根強い反ユダヤ主義であった。知識人の介入そのものが、マスコミュニケーションを媒介としてこうした概念を巡る論争を激化させた。ペギーが後年(1913年刊行の“Argent suite”)語るように、若いドレフュス派として軍隊さながらソルボンヌに駆けつける(porter nos effectifs sur les points menacés de la Sorbonne)日々を送る。また、妻の持参金で98年5月に開いた書店はドレフュス派の集会所となる。さて、一軍人の再審要求運動が見せた政治的展開について、1910年のペギーのテキストは一切の政治化への断固たる拒否を表明する。反復が決意を表明するとしても、そこに明らかになるペギーの態度は極めて曖昧である。

「筋金入りの国家主義者達が、我々を外国人の党派と呼んでいた時、彼等にできたのは精々我々を中傷することだけだ。世俗的な損害を我々に与えること、究極的にはぎりぎり世俗に留まる、最高限に世俗の枠いっぱいの損害を我々に与えた

ただだ。ところがジョレスが我々のために語る時、我々のために胸襟を開き、それ故に我々の代表格として、ジョレスがドレフュス主義とドレフュス事件とを、一方では政治的反軍主義に挟み込んでいた時、エルヴェ⁽⁸⁾流の反軍主義、エルヴェ流の反軍的政治の内に、煽動的で、反軍主義的でエルヴェ流のデマゴギーに一方で挟み込んでいた時、そして他方ではもうひとつのデマゴギー、即ち反キリスト教的デマゴギーの内にドレフュス主義とドレフュス事件を挟み込んでいた時、彼はドレフュス主義のまさに心臓部を損なっていたのだ、傷つけていたのだ、害していたのだ⁽⁹⁾。」

ペギーにあってはドレフュス派であることと、軍を敬愛し、国軍を通して共和国を愛することは矛盾しない。むしろエルヴェの反軍主義はペギーの言う「ドレフュス事件のミスティック」を損ねるのであって、「挟み込む」intercalerという語を選んで、ミスティックが異質で体系的な言述に結びつけられて当初の意義を失なっている様を如実に表現している。軍隊に続き教会もペギーのドレフュス主義を怯ませない。彼は、「ドレフュス主義のミスティック」が「少なくとも三つのミスティック、即ちユダヤ教、キリスト教、フランスのミスティックが最高潮の内に交差しているもの⁽¹⁰⁾」だと考えた。感動的な、ベルナル・コラザール⁽¹¹⁾ 弁護論もその延長上にある。ところが、これらの主張は前述の明瞭な政治的拮抗を背景にしては何ものをも意味し得ない。ペギーのテキストは、政治的文脈での曖昧さを増幅させながら政治を拒否する。

ドレフュス事件は、他ならぬ政治化を通してジョレス主導の議会内社会主義勢力の結集を生み、1899年末の大会を経て、1905年には統一社会党 Parti Socialiste Unifié 別称 S. F. I. O.⁽¹²⁾ の誕生を見ていた。ドレフュス事件が社会改革の、ひいては革命の契機とも考えられるのは、それが社会運動史のコンテクストにもつ大きな意義からである。それでは社会改革の要請に対して、ペギーは『我等の青春』の中でどう答えているだろうか。ジョレスに対抗するペギーは、民衆の悲惨から説き起こし「ブルジョワ化した聖職者集団⁽¹³⁾」を指弾して「深くカトリック的な⁽¹⁴⁾」社会主義を唱える。ペギーは社会変革の担い手として信仰を考えている。

「教会は、教会もまた万人と同様、経済革命、社会革命、工業革命の犠牲を払わなくては、民衆を自分に再び開かせる事などではまい。現世の革命とは永遠の救済の謂いではあるが⁽¹⁵⁾。」

ここに明らかに述べられているのは、フランス革命に必ずしも準拠しない型の、フランスの伝統的な左翼思想である。即ち、経済的進歩を信頼し、同時に、倫理性に基づく社会的正義を実現しようとするものである。階級闘争の入る余地のない左翼思想、その原動力をペギーは共和国が1905年に「政教分離法」で遠ざけた教会に求めたのであ

る。

以上の略述で知られるように、『我等の青春』に見られるペギーのミスティックは、政治の文脈に照らしていかにも時代錯誤的である。ドレフュス事件以後が専ら政治の次元で争われ、政治の律する思想表現形式において問題にされていた筈の1910年当時に、『半月手帖』誌に掲載されたこの文章の内容がどれだけ一般読者の理解を絶しており、どれだけ実践上の無効を運命づけられていたかは疑いを容れない。ペギー自身も、この文章を「あるドレフュス主義者の告白」Confessions d'un dreyfusiste と呼びながら、自分と公衆の懸隔を実感していたろう。ペギー研究者の指摘するように『我等の青春』はまず何よりも特定の読者、即ち『我等の過去への弁明』の著者ダニエル・アレヴィー Daniel Halévy への返答であり、右翼の論客への拒否であり、同志ジョルジュ・ソレル Georges Sorel への留保であったろう¹⁰。だとすれば『我等の青春』の内容の難解さは、特定の読者——前出の思想家達は皆、本文中に名指しされる——に語りかけるペギーの言述の性格が、公衆との開かれたコミュニケーションに適していないため生じるとも考えられよう。だが、公衆との懸隔は「不利な地歩」として冒頭から強調されていた。この文章を一個の文学作品として読む時、内容の理解しにくさ、曖昧さ、容認しがたさ、つまりはペギーとの懸隔は、果たして負の要因にすぎないのだろうか。内容について言えば、著者自身十分に説き明かしていない「共和国のミスティック」も、彼がキリスト教および愛国主義となんとか両立させようと腐心する特殊な「ドレフュス事件のミスティック」も、読者には曖昧な言葉の連なりに見えよう。一方で、作者ペギーの存在感は雄弁な語り口も手伝い、重く厚く読者に迫って来よう。『我等の青春』の主題は、ドレフュス事件のミスティックとは何か、という議論だけでなく、それを伝達しようと試みる語り手、ペギーその人でもあるのだ。この語る主体は自分が孤立していると言う。孤立する「我等」なのだ、と言う。しかしこの孤立には、どこか人に知られない使徒の趣きがある。なぜならペギーの文章はあまりに確信に満ちているからだ。

『我等の青春』の中でも特に有名な、ベルナル＝ラザール弁護を例に採ると、確かにこの箇所は同年1月に発表した『ジャンヌダルクの慈愛の神秘』がパレスやドリュモンら反ユダヤ主義右翼の論客に好意的に迎えられたのに水を差している。ベルナル＝ラザールはゾラに先立ち1896年、ブリュッセルから筆を採った先駆的、ユダヤ人ドレフュス派である。また、このラザール弁護は『我等の青春』にキリスト教と社会問題を持ち込み議論する契機となっている。ユダヤ人と彼等の宗教への偏見は言うに及ばず、「金貸し」のイメージがその民族と分かち難く結びついているからである。しかし、ペギーの弁護はこのような叙述上の戦略を備えながらも、大きく逸脱して行く。ユダヤ＝寄生的富者、という図式を覆すべく、ペギーが貧しいユダヤ人を語り、富者と妥協した教会を非難する時、その語調はもはや論証的ではなく、むしろ説教の様子を帯びる。特にジョレスとの訣別を明言しつつ、1903年に死んだ友、ベルナル＝

ラザールとジョレスを対比し、「ドレフュス事件のミスティック」の正統な後継者として自ら名告りあげる時、ペギーの確信は死者の追悼の内に深化されるのが判ろう。

加えて、『我等の青春』にはもうひとつ、重要な議論があり、作者はそれをやはり極めて確信的に叙述する。しばしばその陣営からドレフュス派が論難された国家主義思想およびキリスト教思想には、多くのページが充てられ検討されている。「外国人の党派」との論難はそれ程までに本質的なドレフュス派批判だった。だが、ペギーは終局的には「フランスの永遠の救済」(原文ゴチック)の立場に自分達、真のドレフュス派が居たと宣言する。そして、そう告白録に書くつもりだと言う。政治的配慮が一般に、抗争に基く状況把握と、妥協への強い関心とを同時に示すのに反し、ペギー流のミスティックには前提として最終的な調和の像があり、各党派の闘士は、自身が自集団と共有する古い記憶を掘り下げながら、ついにはかつての敵との和合に達するとされる。各政治運動のミスティック、それを仮に集合的無意識と呼ぶなら、時間軸を消去した、ある「永遠」において、それらの無意識は同根であると判明するとされる。「フランスの永遠の救済」と述べるペギーは、もはやドレフュス事件を国防対人権の構図では眺めておらず、あたかも彼の社会党入党以来変わらず抱いてきた「調和的理想郷」*cit  harmonieuse*¹⁷⁾から懐古談として叙述しているかのようである。「フランスの永遠の救済」の立場に居た、と半過去形で叙述するのは、回想録形式の含意する視座から、若きドレフュス派闘士の過去を眺望するからである。だがペギーはもうそこには、そしてまだそこには居ない。「告白録に入れるつもりだ」とまさに書きつつある彼は、「調和的理想郷」の到来を深く確信しつつ、それを信じない人々の間で苛立ちながら生きているのだ。そこには砂漠で説教する預言者の趣がある。

ここからペギー独特の「裏切り」のテーマが生じる。前述の、特権的で、確信と情熱に満ちた視座は悲劇的な二重の背信を敢えて犯して得られたのである。即ち、彼は自分のキャリアとそれへの周囲の期待を犠牲にして、敵対する政治と戦い、後には味方の政治から身を剥がす。自身の正統性への確信と、永遠の救済への揺るぎない信頼とから裏切るのであった。エマニュエル・ムニエ Emmanuel Mounier はそこに正当にも「アンチゴネーの語気および、いわれなき不幸のもつ偉大さ」を読んでいる¹⁸⁾。

ペギーのミスティックは調和を志向する故に、対立抗争を刻印された政治的現実と相容れない。そこから、現実の全体を拒絶するかのような悲痛な叫びが生じる。『我等の青春』が教育的たりうるとすれば、それは提示された幾つかの議論についてではなく、作家一般への倫理的要請に関わる。しかし倫理の要請に適わしい言語表現を模索したペギーの努力が、言わば『我等の青春』の造型性において明らかになるのは、逆説的ではあるがドレフュス事件が政治的に過去に押しやられ、政治の文脈から形式が解放されきってからであろう。その時初めて『我等の青春』の実現した、ある特殊な文章表現が、表現として享受されるのである。

2. 1930年代の「ベギー主義」

ここで「ベギー主義」Péguyisme と試みに訳を付した現象は、「ベギー熱」とも言い得る作家への関心の再熱を意味している。とはいえ、1914年に戦死したこの作家が再び読まれるようになったのは、没後2年目から40年かけて完結したガリマル社版全集⁹⁹にのみ依るのではなく、文芸ジャーナリズムが様々な記念行事に作家の生没年を思い起こしたからでもない。そこには1930年代前後という年代が決定的な役割を演じていると思われる。

ミッシェル・レイモンは『小説の危機——自然主義直後より1920年代まで』の緒言で、1930年の転回点としての重要性について触れている¹⁰⁰。彼によれば、「1930年頃、精神の志向性の非常に異なった、ある新世代が現われ」て、いかにもシュールレアリスト達の「何のために書くのか」という問いに刻印づけられた者らしく、既存秩序とその価値の批判に着手した。この世代の代表としてレイモンの挙げるのは、アクション・フランセーズ運動から出たマクサンス J. P. Maxence。ベギーの思想について三人で共著を準備しつつあった実子マルセル・ベギー、ムニエ、およびイザール G. Izard。さらにこれらの、ジャック・マリタン Jacques Maritain の影響下にあったネオニトミストに加えて、ドリュ・ラ・ロシュルと『デルニエ・ジョール』誌(1927)を共同編集したベルル E. Berl。最後に挙げられるのが社会党寄りのゲーノ J. Guéhenno であった。「現代世界の諸問題を秘かに志向するある文学が、現実から切り離された文学に交替しつつあった」と要約される。その意味で、当時デビューしたばかりのアクション・フランセーズ系文芸・映画評論家ブラジャック R. Brasillach が1931年夏に行なったアンケートを「戦後の終焉」と題したのは、当時の「総決算」への関心を象徴的に表現している。

以上のレイモンの指摘に加えて、共産主義の立場から文芸評論を展開したニザン P. Nizan の活動が1930年頃から本格化する¹⁰¹のも注目に値しよう。また、20年代半ばから、ブルトン A. Breton、アラゴン L. Aragon らのシュールレアリストの共産主義への接近が明瞭になる¹⁰²。このようなフランス文学の転回点において「ベギー主義」が検討されねばならない。

文学者としてのベギーは、ダヌンチオ d'Annunzio、バレス、初期のジッド Gide とともに、19世紀末から20世紀にかけて合理主義とブルジョワ道徳に反発し、生命を謳歌した作家達の中に数えられており、20年代の公式の文学趣味からは疎んじられていた。30年代にベギーが再登場するのは、前述のムニエ、イザールら、後に「エスプリ」誌を創刊する若い作家達においてであり、彼等が文筆業と政治行動を深く関わらせようとしている時に、ひとつのモデルとして再来したのである。

ルーベ・デル・ベイユ J.—L. Loubet del Bayle は『1930年代の非順応主義者達 (副題) フランス政治思想刷新の試み』において、これらの知識人の思想を、彼らが

1930年前後に相継いで発刊した雑誌の消長とともに叙述している。その中で彼等の文学的傾向に関する次の指摘は注目されよう。

「〔文学の「無償性」を批判するという〕この見地から、これらの集団は、1930年代には、歴史のドラマから逃げ出すまいとの懸念のうかがえる全ての作品に快哉を叫んでいた。例えばヴァレリー Valéry の『現代世界の省察』から、ベルナノス Bernanos の『保守主義者の大いなる恐怖』サン・テクジュペリ Saint-Exupéry の『夜間飛行』そしてマルロー Malraux の『人間の条件』に到るまで。それ故に、彼等はシャルル・ペギーを懐古し、一糸乱れぬ賞讃を送ったのである²⁰⁾。」

これらの集団は、ルーベ・デル・ベイルによれば三つに大別され、1934年2月6日事件²⁰⁾以前に大同団結の可能性を示しながらもその後、政局の流動化と作家達の立場の相違とから様々な道程に分岐して行く。三つのグループとは、まず、当時一般に「若い右翼」Jeune Droite と呼ばれていた、マクサンスら『カイエ』誌に集った作家達である²⁰⁾。次に『フランスの頹廃』(1931)著者二名を核に、『新秩序』誌を発刊したグループ²⁰⁾。最後にエマニュエル・ムニエを中心とする『エスプリ』²⁰⁾誌である。たしかに彼等の政治的、道徳的見解は互いに相違していた上、雑誌と運動の財政的基盤および協力者募集に関する配慮もまちまちだったので、ルーベ・デル・ベイルが第1部第4章に「若者達の運動に共同戦線はあったのか」と疑問詞付きの標題を振ったことにも現われるように、三つのグループが実際上の共通行動を取るのには稀であった。しかし、彼等は思想内容の上では多くの共通項を持っており、著者は第2部全体をこれら共通項の総合的理解に充てている。ルーベ・デル・ベイルはこうして三つの公分母を指摘する。まず、現代社会そのものが彼等によって仮借なく告発された点。次に彼等が、自分達の文章を発表する雑誌を主宰しながら、より実践的な活動に向かう、一種の行動第一主義的感情を持っていた事。最後に、これは第二の指摘と矛盾しそうに見えるが、彼等の推進する「革命」には精神的な、或は物質世界から切り離された原則に依るという意味で神靈的な側面があった。(révolution spirituelle)

これら三つの主題とペギーへの言及はどう関わっているだろうか。

彼等が、社会と道徳の混乱の元凶と断じた金権主義を批判する時、ムニエにせよ、シャルル・モラス Charles Maurras と袂を分かった「若い右翼」にせよ、金銭は貧乏人の血と述べたレオン・ブロワ Léon Bloy やペギーの呪詛をわが物とする。『シャルル・ペギーの思想』の中でムニエはペギーの金銭憎悪を粗述して「金銭の君臨は他の全ての王の治世の終わりを、即ち自由思想の、誠実かつ愉快な労働の、無私の一行為の、そして聖徳の御世の終焉を末代まで記念する²⁰⁾。」と記すや、ペギーの時代を離れて自分の考えを付け加える。

「なるほど戦争以来、事態は推移した。金銭に熱狂するうちに、物欲は転じて危険と冒険への嗜好となった。ちょうど、観念に熱狂するうち、不安が我等の偉大ともなり悪徳ともなったように。だがその危機の及ぶところは狭く、既に興奮止んで新たな慰安が確立しているのである⁶⁰⁾。」

驚くべきことにムニエは、後述するドリュ・ラ・ロシエルが第一次大戦直後のフランス社会が、蓄財と課せられた労働というブルジョワ金銭道徳を仮初めにせよ維持できなくなったのを看守して狂喜したように、ブルジョワ社会の危機を歓迎する感受性を持っている。しかし、金銭に秩序づけられた現代世界を嫌悪するとはいっても、これらの若い知識人の反資本主義は経済的次元から倫理的次元にたやすく移行する。ムニエは社会階層というより、ブルジョワ的で金権主義の精神性を攻撃する。1933年3月『エスプリ』誌上で彼はこう述べる。

「ブルジョワは地上のあらゆる箇所の、あらゆる階層の人々と交際する。仮にその道徳がある階層から生じたとしても、重いガスのように社会の底辺に滑り込んで行ったのだ⁶¹⁾。」

ブルジョワ思想の感染性が問題であってみれば、その観点から眺められた現代世界が等しく呪われた世界と映ずるのは当然である。モニエ達の観点は、彼等がカトリック系知識人であり、「エスプリ」創刊に際しカトリック界から援助を仰いだ事からも知られるように、宗教家の警世の様相を帯びる。

ここで付言しておくべき事は、現代社会への「呪咀」はそれが予感として表現される限りにおいて説得力を持ち得たが、恐慌の深化と政治不安の長期化に伴い運動の有効性が問われるに至って、言葉の空転を招き始めた点である。ルーベ・デル・ベイルが分析を1934年2月6日事件で打ち切ったのもそのためである。彼は、彼の扱う非順応主義者達の成した「診断が、1933、34年の誰の目にも明らかな政治的・経済的危機を、ある意味で預言者のように予見した」点に注目する。ところで、危機を預言者とは異なる枠組で予見しつつ自分の評論活動を組織した者もある。共産主義者ポール・ニザンの目に、モニエ達、非順応主義者はどう映じていたのだろうか。

ニザンは『ルヴュ・デ・ヴィヴアン』誌1932年9～10月号に「フランスの革命文学」と題した一文を載せ、『新秩序』誌の母体となった『プラン』誌について、その先見性を評価しつつもファシズムへの親和性を警戒した。同年12月の『新フランス評論』誌上に「新秩序」グループのドニ・ド・ルージュモン Denis de Rougemont は非順応主義者の三グループを含む左右両陣営の若手評論家を集めて「権利回復要求ノート⁶²⁾」なる特集を組んだ。執筆者の一人、ニザンはレーニンに依拠しつつ「〔似而非革命家の〕繰り言は明日にはフランスファシズムに迷い込んでしまうだろう⁶³⁾。」と警告した。

同一の観点から、非順応主義者の思想全体をニザンが俎上に乗せるのは、翌年『ウーロップ』誌1月号の「ある統一戦線について⁶³⁾」である。彼は伝統的な左右対立の後に、議会の外で、共産主義者と（ムニエの主導する）ベルソナリスト personnalisteとの対立が重要性を帯びるとまで言っている。ニザンの見解は、30年代の非順応主義者達の言述が政治思想史の視野においてしばしばフランスファシズムと同定されている現象を先取している⁶⁴⁾。しかし、ここでニザンの思想にさして影響を与えなかったと想像されるペギーの影をムニエ達の思想に探る時、彼等の言葉は、後述する1940年代の対独協力者、就中その過激な部分（つまりファシスト）と際立った対照を呈する。

1930年代のペギー主義者達は現代社会の、殊にその金権主義的側面に、ペギー經由の悲観的なまなざしを向ける一方で、彼等の倫理意識の源泉であるキリスト教会と自己を厳しい緊張関係に置く。『我等の青春』のペギーは「調和の理想郷」——マリタンの説く新たなキリスト教国に通底しよう——を深く信じつつ、未だその到来せざるを痛感し、その複雑な期待感をもとに預言者の語調を造型した。ペギー主義もまたキリスト教会との、敢えて言えば愛憎感情のうちに、彼等の仮構された沈痛な肉声を造型する。キリスト教会は、ダニエル・ロップス Daniel-Rops の言葉を借りれば「宗教を慈善団体に同化して」文質文明主義の現世と妥協する深みにはまって行った。公式のキリスト教会の周縁に居るとは感じながらも、彼等は自分達の信仰の正統性を制度としての教会にはなく、思索の中に求めていた。『エスプリ』誌の主要メンバーは、ムードンのネオ・トミスト哲学者マリタンの日曜会に集っていたし、『カイエ』誌の寄稿者達はモラスと王党主義を尊重しながらも、1926年末にローマ教会から破門されたアクション・フランセーズ運動から離脱していた。彼等が、自分と同様、激しく誠実な信仰の故に公式のカトリック界から疎んじられていたペギーに、自己の輝かしい映像を見たとしても不自然ではない。その意味で『新秩序』誌同人ダニエル・ロップスの以下の証言は決定的である。

「もしペギーやド・フーコー神父⁶⁵⁾のような人々が存在して、最高の愛徳に最大の猛烈さ（《violence》）を与えていないのだとしたら、そしてもし何処の僧院にも、拒否に他ならぬこの高次の形態の猛烈さに身を捧げる人がもう存在していないとしたら、その時は上級階級の住む小教区で午前11時半にとり行なわれるミサ以外に何ら顕現する術を持たぬ教義などが、どんな余力を保持し得るか疑わしい限りだ⁶⁶⁾。」

フランスの頹廃、ひいてはシュペングラー流の「西洋の没落」は兩次大戦間の時代を特徴づける主題である。だが、1930年代のペギー主義の場合、デカダンスの認識とその病根への激しい批判とが相俟って、論者達には彼等の精神的母体そのものへの告発が生じる。その結果、彼等は自分達の生きる現代社会とその諸価値に対し、ペギーの

ように愛憎に満ちた猛烈な関わりを選び、敢えて孤立する確信的調子を選んだのである。この点で、1940年代の対独協力者の多くの、シニスムか或は幻惑に特徴づけられたテキストと区別されよう。

彼等の語調がそうであったとすれば、行動第一主義にも何らかのペギーの影響が認められよう。「エスプリ」誌は発刊まで2年の準備期間を要したが、雑誌の母体には1930年前後のペギー研究サークルがあり、ムニエとイザールはそこで出遭い、マルセル・ペギーとともに彼等の最初の著作を仕上げる。それは1931年に『ペギーの思想』と題され、マリタン責任編集のプロン社「金の葦」叢書中の一冊となる。この時期に高等師範学校を卒業し地方のリセ教師になったムニエについて言えば、マリタンとの交流から示唆されていたであろう哲学による宗教思想の深化という方針が、ペギーの影響で、雑誌と運動の主宰に実践の方向転換されたと考えられる。しかし、ペギーが、モニエにユルム街から高等教育に向う周知のキャリアを断念させるのに貢献したとしても、師の思想が他方で、「政治」による「ミスティック」の回収に弟子を警戒させたのも確かである。道徳の混乱に社会全般の危機を予感していた彼等、若い知識人にとって、政治は理想を実現する好機であるとともに、運動の自主性を冒す可能性も持った。このような政治への不信は、政治こそ真先に改革すべきと考えた、2月6日事件以後の諸運動には見られないし、アラゴンやマルローなど後に党派的信条に加盟した作家達にも珍しい。「エスプリ」運動の「ミスティック」が党派的な「政治」に墮するのを危惧する声は、同人がより活動的な冒険、「第三勢力」運動に協力し出すにつれ具体化してゆく。

「第三勢力」運動は、雑誌発刊と殆ど同時に1932年末に成立し、新政党の綱領を討議した。このグループはイザールに主宰され、ガレ L.-E. Galey とデレージュ A. Déleage が補佐した。イザールは法律島の人間で、1936年選挙では33歳の若さで代議士になる。「第三勢力」はファシスト的との批判に応じて、幻想に酔う既成右翼を罵倒し、当時カルチュ・ラタンを牛耳っていた暴力的なモラス派右翼（「愛国青年同盟」や「カムロ・デュ・ロワ」）としばしば衝突した。この間、1928年から左翼の急進社会党代議士だったベルジュリ G. Bergery が脱党して、1933年4月、反ファシズムおよび反資本主義を標榜する「共同戦線」を結成した。当時、急進社会党内改革派「青年トルコ党」の主謀者だったベルジュリは、彼の党を徹底的とする人々の期待を体現しており、例えば彼の友人、ドリユ・ラ・ロシュルは1931年、政治評論集『祖国に抗してヨーロッパを』を彼に捧げていた。「共同戦線」の機関誌（隔週刊）「フレーシュ」は、イザールら若い知識人を魅きつけ、「第三勢力」は次第にベルジュリの運動と提携し始めた。その結果、イザールはムニエの要請で『エスプリ』誌の編集から降り、雑誌と「第三勢力」運動との実質的決裂⁶⁾は、1933年7月号誌上で、ムニエとイザールの共同署名により公表された。1934年2月6日事件以後、「第三勢力」と「共同戦線」は、11月に合同を果たし「社会戦線」を生む。イザールの仲間とムニエとの関係はこうし

て修復不可能となった。

ムニエが政治への潔癖さをペギーから学んだとすれば、ルーベ・デル・ベイルの他の非順応主義者達は反逆の行動家ペギーをむしろ範としている。例えば「若い右翼」の『カイエ』誌(1928-1931)はペギーの精神的後見の下に出発し30年代の「ペギー主義」の代表的証言となっていたとされるが、ペギーはそこでは「革命的カトリック」を自称する同人達からプロフおよびベルナノスと並び称されている。両者とも『アクション・フランセーズ』紙からは必ずしも賞讃を得ていなかった。『新秩序』誌の若者達はさらに明瞭に『半月手帖』誌編集長の社会主義者の側面を強調する。つまり、彼等はペギーをプルードンおよび無政府主義的革命家ヴィクトール・セルジュ Victor Serge と並べるのである。ここからペギーの著作への二つの異なったアプローチが想定される。ともにドレフュス事件や成立後間もない第三共和国⁶⁰の史的文脈からは切断されているものの、ムニエの読解はペギー思想の統一性に注目し、そこから作家たるものの倫理的要請を抜き出すものであり、他方、ペギーの名を種々の権威的作家および思想家と結びつけることで、1930年代の「ペギー主義」は革命思想の一系譜にペギーを取り込んで行った。彼等の運動の目標が、ムニエの言葉を借りるなら「精神的(ないし神靈的)革命」であった事を考えあわせると、『我等の青春』の著者の、理想主義的で折衷主義的な「ミスティック」が1930年代に読者を得たのも納得できよう。

革命とはいえ、『新秩序』『エスプリ』両誌の同人は等しくマルクス主義には無関心でデカダニズムと金権主義的無秩序とに運命づけられていると彼等には見える現代世界にあっては、新しい人間観の樹立がまず求められていた。社会主義者ペギーが、まず自分自身の改革(socialiser sa vie)を主導した⁶¹のと呼応する発想である。『エスプリ』創刊号でムニエは「ルネサンス再開」を訴え、同誌は後にマルクスの初期著作に見られるヒューマニズムを強調する論文を掲載する。彼等の革命とは第一義的には自身と読者の、内面的刷新だった。

ここでムニエが『ペギーの思想』執筆にあたり、ペギーの語彙と枠組をわが物とした点に注意するのは無益ではあるまい。ムニエは反近代主義に根ざすペギーの二分法を共感をこめて辿っている⁶²。即ち、「有機的」世界は1880年頃、「機械的」世界に急速に取って替えられた。以降、各個人がそこで自分の「種族」の深い記憶を見出すべき「私」の領域は損なわれ、思想は「公」の視線に身売りする。ペギーの強調する「記憶」に対立するのが「歴史」という教義で、それによれば資料カードを適当に按配しさえすれば人間的真實の一切が把握できると豪語される。「歴史」的思考の「記憶」への裏切りはドレフュス事件に絡めて弾劾される⁶³。ムニエは、奇妙なことに、ペギー思想にあって最もバレスに通底する部分、殊に『ナショナリズムの舞台と教理』と共通する部分に着目している⁶⁴。さて、以上に略述したペギーの人間観、および彼の影響を受けた1930年代のペギー主義者の人間観に即すと、新しい人間は、種族raceの記憶に拠る精神性を体現すべきとされる。なぜなら、反主知主義的基礎を持つ上記の

二分法の立場からは、現代世界の批判としてまず誤った世界観からの解放が叫ばれたからである。ペギーが社会主義者としてドレフュス事件に参入するまさにその時に（1898年6月）彼の理想を『マルセル、調和の理想郷の第一の対話』として出版したように、彼等も運動の目標を直観的に把握、それを一種のミスティックとして絶対的に信じたため、論理的および実証的証明手続は手厳しい警世の言辭の内にかすんで行った。したがって、将来の革命を真摯に論じながらも、彼等はむしろ、少なくとも無意識には、ペギーの「調和の理想郷」に対応する観念を歴史上のある時間に求め、或はこれは同じ事に結局なるのだが「記憶」の古層に探り、一方でその観念を政治党派的議論の外に置こうとする傾向があった。この理想郷は論証には適しておらず、神話的表現を伴う文学表現において叙述された⁽⁴⁾。したがって、ペギーへの言及を通して「精神的革命」の後見人としてのペギーが再発見されるとともに、1940年から44年にかけてフランス占領下に喧伝されたペギー像も輪郭を現わす。1930年代の「ペギー主義」は、その古典から道徳的反資本主義、政治への倫理的警戒心、そして一種の共和主義的ポピュリズムを借り受けていたが、代わりにペギー思想の内包する親ファシズム性も負債として相続したのである。

もちろん1930年代前半の「ペギー主義」をファシズムと同一視する事は慎まなければならぬ。例えばムニエの主導する「人格主義的革命」は、ブルードンの思想的伝統も加わり、国家形態への問いを背景に追いやっていたし、最も王党派的な「若い右翼」に属する知識人、殊にティエリー・モニエ Thierry Maulnier がエリートの指導的役割を重視し独裁制への関心を示していたのに対し、『我等の青春』に「民衆のミスティック」（ルーベ・デル・ベイル）の輝かしい表現を見ていたムニエは不信感を抱き続けた。ただし彼等ペギー主義者の「革命家」には、ファシズムへの鈍感さが認められよう。

現実政治の次元では、これらの運動は時の力に翻弄される。30年代後半に入り「人民戦線」を巡って国論が分裂し、エチオピア戦争、スペイン内戦、ドイツの東方進出と続く対外政策が、全対主義対民主主義というイデオロギイ的構図を国防問題の不可避の枠組として要求するようになると、フランス国内のあらゆる政治勢力を攻撃する『エスプリ』誌等、30年代前半のペギー主義者の立場が曖昧になったのは否めない。とはいえ1930年代の「ペギー主義」は知識人の行動に関する自覚を促していた。ムニエの例が端的に示すように、知識人は党派政治に盲目的に参入するのではなく、また思索の「象牙の塔」に後退するのでもなく、「政治」と「ミスティック」の境界に身を置くよう求められ、その立場にふさわしい極めて情熱的で明晰な声が造型されたのである。

即ち、彼等の文章は、内容を読者に伝達するとともに、しばしば語る主体の困難な状況に読者の注意を喚起する。評論でありながら前述のダニエル・ロップスのキリスト教批判は、或は思想の解説をめざしながらモニエのペギー論は、同時に文章を用い

て行動する知識人の自己省察である。紙上の行動は、語りの伝統的技法を駆使して物語化され得るが、評論は文章の性格上、登場人物の描写を欠くために、内的独自の手法に訴えることになる。この声は、有効に動員に寄与するかどうかは別として、政治運動に美学的装飾を与えた。ペギーの『我等の青春』に見たように、その挫折にさえも、興味深いのは、やはりそれぞれの哲学的信条を下に政治参加しながら、ブラジャックやルバテ Rebate ら『ジュ・スイ・パルトゥ』誌の作家達も、ゲーノら社会主義傾向のある作家達も、このように自ら勤んで孤独な説教家を買って出た者のもつ悲劇性を仮構してはいない事である。

3. 「対独協力期」の「ペギー主義」：ドリユ・ラ・ロシュルの『ジル』を中心に

1930年代の「ペギー主義」を考える枠組に、ドリユの作品を取り込むのは不適当と思われるかもしれない。なぜならドリユが好んで言及するのはモーリス・バレスであって、その反ドレフュス派としての立場はもとより、解体とはいわぬまでも頽廃しつつある美に強い愛着を持つバレスの作風は、シャルル・ペギーとはかなり異質だからである。また、30年代のペギー主義者を特徴づけた行動主義にしても、ドリユは1925年から27年にかけてはバレスの露骨な政治参加に不信を示していたものの、1936年から39年初頭にわたるジャック・ドリオ⁽⁴⁶⁾の反人民戦線運動を選択するにあたって彼の思想的指導者と和解していた。ドリユは、生命を危険に晒し、手にペンでなく剣を感じる⁽⁴⁵⁾、という、バレスの美的行動意識に近い考えを発展させる一方で、ドリオの党の機関誌上で、バレスの国家主義を下敷きにした論陣を張った⁽⁴⁶⁾。

また、ドリユがペギーの作品を本格的に論じ出すのは1940年の休戦以降である。ところでヴィシー政権下の四年間は、例えばユダヤ人問題担当ヴァラ X. Vallat⁽⁴⁷⁾など対独協力者が自分等の政策に哲学的衣装を施すためにペギーの名前を利用していた時代である。「エスプリ」誌のムニエが検閲に抗すべく政権担当者と同様にペギーに拠って、読者にヴィシーの反ユダヤ政策を警戒させたエピソード⁽⁴⁸⁾は、ペギーの読解をめぐる当時の葛藤をよく示している。つまり、占領下のフランスには、直接占領のパリにも、ヴィシー政権の自由地域にも、二種類の「ペギー主義」が存在していた。ひとつは、ヴィシー政府に奨励され、ペギーの全体像をよく知らぬ読者に大量に供給されたペギーである。他方は30年代のペギー主義者およびその後継者が、検閲と政敵（アクシオン・フランセーズ系「ジュ・スイ・パルトゥ」誌など）に抗して、レジスタントとはいわぬまでも少なくとも反ヴィシーの読者に向けて慎重に伝えていたペギーである。たとえ、「エスプリ」誌が1940年11月、リオンで再刊した事がヴィシー政権寄りとの嫌疑をムニエに招いたとしても、また彼自身政府公認の活動、例えばユリアージュ幹部養成学校⁽⁴⁹⁾に講師として協力したとしても、彼の雑誌は1941年8月に発禁処分

に遭うまで、よく「国民革命」と距離を取り得たし、ヴィシーの対独協力者によるペギーの回収をしばしば挫折させ得たのである。1940年代の「ペギー主義」の葛藤状況についてはバスティエール J. Bastiaire の考察が「レジスタンスを鼓舞したペギー⁶⁰」という題名から既に示唆的だろう。彼によればムニエはペギーにちなんであらゆるミスティック、それもキリスト教のだけでなく、共和主義と社会主義のミスティックも含むあらゆるミスティックを要求し、これは当時ヴィシー政権の腐心していた第三共和制の有罪宣告と矛盾した。「エスプリ」誌はスクレタン R. Secrétain の次のテキストを掲載し旗色を鮮明にする。

「死を越えて彼〔ペギー〕はあらゆる併合、自身についてのあらゆる悪意ある解釈に抗議し続けている。彼は自作に死後も目を光らせているのだ⁶¹。」

バスティエールは1977年に正当にも「解放に続く数年の挫折のひとつは、ペギーニペリがペギーニペタンに凌駕されてしまったことだ⁶²」と嘆いたのである。さて『エスプリ』誌に加えて、当時自由地域の文化的レジスタンスの中心地のひとつだったリヨンで創刊された、これもペギーを思わせる『我等の青春のノート』(Cahiers de notre jeunesse) 誌も、パリの対独協力者から反政府的態度を指弾される。このように、40年代の「ペギー主義」は、ペタンの言述とレジスタンの言述の交錯する微妙な領域を構成していたのである。

以上に述べた事実から、ドリユもまた、確かに、両次大戦間の時代には『我等の青春』の著者に無関心だったが、40年の軍事的敗北と対独協力に伴い文化的な決算を迫られて初めて『半月手帖』と『ジャンヌダルクの慈愛の神秘』の作家への共感に気づいたように見える。しかしドリユのペギーにまつわる言述は、先のペギーニペリ(レジスタンス)対ペギーニペタン(協力)の構図にもうひとつの陰影を加えている。ナチ占領下のパリで『新フランス評論』誌を復刊させ、第2号でペギーを論じた時、ドリユは直接には前年ガリマール社のブランシュ版で大衆化されたペギーの『シチュアション⁶³』を引用しながら、作家をこう位置づける。

「秘かな決意と反論の余地のない神秘性を持つ人々の一人。彼等の結社 phalange は外部の、公式のフランスにあって崩壊しつつあったものに対して、殆ど無言の証言をあげていたのだ⁶⁴。」(傍点引用者)

「神秘性」という語の選択はドリユにあっては恣意的ではない。それは、彼に早くから宗教用語を濫用する傾向があったからではなくて⁶⁵、彼の神秘主義とはいえないまでも宗教的な関心が当時深化しつつあったことの反映が読みとれるからである。彼が完全版の出版を望み、現在『秘話』に収められている箇所以外は未完の「日記、1939年

「1945年」は、1939年9月9日、供儀と世界の更新（再創造）を巡る考察をもって幕を開け、ランサール J. Lansard の浩瀚な研究書に全文が再録されている⁶⁰。ところで、ペギーを性急に「一群の作家⁶¹」と一括してしまうのは問題だろう。批評に文学史を持ち出すのはドリュの好む手法で、しばしば十分な論証を欠くのだが今回はやや明瞭なプログラムがある。自身の弁によると、彼は「奇妙な戦争」の間にルネサンス以来のフランス文明を歴史的に考察した本を書いており、これが1941年にそのまま『今世紀を理解するための覚書⁶²』になる。

以上の考察から、当時ドリュは一般的なフランス文学の常識からは見えにくい、ある文学伝統の存在を立証しようとしており、その隠れた伝統は、対独協力者からは頹廢芸術、知性主義芸術として指弾された公式の文学に対し、ちょうど立ち直ったフランスが、「外部の、公式のフランス」に対する如き意味を持つ筈だった。それでは、1940年代のペギー主義のどちらが、ドリュの思考に反映しているのだろうか。

先に引いた『新フランス評論』誌1941年1月号の短文では、ドリュも1930年代の非順応主義者達と同様に、ペギーが善意から周縁的地位に甘んじている点と、行動に踏み切った特権的な幻視的説教家である点を絶讃した⁶³。彼がこのように突然の情熱をペギーに示したことは、占領期の初期に『新フランス評論』誌の編集と、ドイツ当局からむしろ敵視されていたガリマル社の思想的保証とを引き受けるにあたって彼が演じたかった役割に照らして理解されよう。ドリュは、非難攻撃文書作家の理想的行動形態をペギーに認めている。倫理意識は、ドリュによれば、凡百の作家にはなく、ペギーや彼のような、人心を訓導する資格のある者にこそ求められる。というのも、「50年来、真の教会博士は教会ではなく文学にしか存在しなかった」（p.205）からである。ここで想起していいのは、占領下の『新フランス評論』誌第1号は、プレイヤード版詩的著作集（1941年初版）に先立ちペギーの「四行詩」を掲載し、また6号までに5回寄稿したうちドリュは4つのテキストで少なくとも詩人の名に言及している点である。彼は、フランス作家のある系譜を幻視的神秘主義と激しい社会批判の輪光で包もうとしているようであり、これは彼が『今世紀を理解するための覚書』でより体系的に試みたのと同様である。ただ後者ではペギーよりプロワに高い評価が与えられてはいるが⁶⁴。

ドリュの「ペギー主義」の別側面は、ほぼ同時期のテキストに表現されている。初期著作にかなり手を入れて再刊する計画に添い、彼は1939年から1940年にかけての冬に序文を書く⁶⁵。結局刊行時に他の文章に替えられたこの未完の序文では、著者の文学キャリアが回顧的展望の下に一個の暴力崇拜者の経歴として語られており、その傾向の抑圧と言えないとしても抑制の時期を初期著作に後続する時代に見ようとしている。さて、序文決定稿は、フランスの頹廢を忘れ難く体験してしまった恐怖を、見かけは散漫な諸作品の共通項としている。これは1942年版『ジル』序文とも重なる大切な指摘ではあるが、「暴力崇拜」については沈黙している。この沈黙が雄弁なのは、ペギ

への言及が未完序文にしか無く、自身の思想的背景を探る時に名前が挙がるからである。ドリュはペギーを、彼が理解するところのニーチェ、つまり主意主義哲学と並べ、スペンサーら社会ダーウィニズム、つまり諸民族の適者生存説として通俗化されることの多かった学説と並べる。彼は続いて、キップリング、ダヌンチオ、未来派、プラグマティズム、ジョルジュ・ソレル George Sorel の革命的サンディカリズムおよび『国民エネルギーの小説』のバレスといった、一見恣意的だが、ドリュの読者には馴染み深い思想家を引く。全ての議論が暴力の考察に充てられたこの序文で、彼なりの、40年代「ペギー主義」を例証するためには、この1914年以前の知的状況を措いてより良い材料は得られなかったろう。彼は明瞭にこう述べる。

「シャルル・ペギーとシャルル・モラスは男性的たくましさ virilité を教授していた。もっとも前者はキリスト教で、後者はギリシャの英知でその教訓を包み隠してのことではあるが⁶⁰。」

もしこの文章が『初期著作集』序文として1941年に出版されていたとしたら、当時有力なイデオロギーだったモラス主義と、前述した解釈上の抗争に巻き込まれていたペギー主義を連結したというだけで、知的抵抗を試みていた人々、例えばムニエや「リベルテ」グループのエドモン・ミシュレ Edmond Michelet の激しい反論を招いたことだろう。このことは、しかし、ドリュがペタンの言述と折合っていたことを意味しない。逆に、男性らしさと幻視者の側面を強調することで、彼はペギーを「ペギー=ペタン」とも「ペギー=ペリ」とも異なる文脈に挟み込んでいたのである。年代的に言って、彼の「ペギー主義」は、ヴィシー政権の機会主義者とは異なり、1940年の休戦に先行する。彼は1939年から41年にかけて、前述の序文を書き、『初期著作集』の手直しは、グロヴェールによれば、また序文決定稿の日付を見ても、1940年3月に完了していたろう。この時期、ドリュは1940年1月から7月にかけて「肉体革命」についてエッセーを書き、これが1941年に『今世紀を理解するための覚書』として出版される。同書の後書きでは執筆時期と、1940年6月時点の思考に自分が忠実であることが確認されている。したがって彼は、独軍の侵攻に伴い1940年6月10日にパリを去る以前に、自分の文学的キャリアをある特定の角度から見たフランス文学史の地平のうちに捉え終えており、その地平にはペギーが無視できない位置を占めていたと言えよう。

ドリュの描くペギー像は、1930年代の「ペギー主義」に一部通底する。それは漫画家ルヴィンの描く農民作家ではなく、社会制度に反対して行動に身を投じる聖職者知識人であり、ムニエが『シャルル・ペギーの思想』で夙に体系化を試みた反近代・反知性主義を継承するペギー観である。だが、ペギーを幻視的預言者として提示し、危機的状況における作家の役割を問うことで、彼は独自にペギーの未知の側面を照射する。ドリュによれば、真の作家は「外部のフランス、公式のフランスにあって崩壊

しつづつあったもの」（『新フランス評論』誌1941年1月号）を鮮明に把握し、「文明の使い古したゼンマイ」（『初期著作集』序文決定稿⁶³）に戦慄しつつも、敢えて警鐘を鳴らす。なぜ、彼等の言うことを信じない公衆のためにそうするのかといえば、それは彼等が頽廢の背後に再生を幻視しているからである。1939年末に出版された彼の小説『ジル』もまたそのように構築されていた。

主人公ジルは、妻の臨終の苦しみと平行するフランスの死を確信しているにもかかわらず、祖国再生のための運動に一度ならず身を投じる。まず、小説を締めくくるエピソード、1934年2月6日事件に関わる、空しい説得のさなかで。次に、エピローグの語るスペイン戦争でフランコ派の闘士として。フランスファシズムになり得たものへの熱い信頼が、議会政治に横領される決定的瞬間に、まさしく『我等の青春』のベギーに小説が言及するのは注目に値する。

「彼〔ジル〕はジョーレスの裏切りを告発するベギーの、雷のような怒りを思いだしていた。ジョーレスはドレフュス事件のときすでに、プロレタリアをフリーメイソンやユダヤ人たちの陰謀の手に委ねてしまったのである⁶⁴。」

ドリュがベギーに関する前述の短文で示した「非難攻撃文作者・預言者・教会博士」の系譜に連なる作家達は、「外部のフランス」を確固として支配する皮相な政治の背後に、もう一つの、内部のフランスの死と再生のドラマを凝視している。ドリュはそれを立証するために『今世紀を理解するための覚書』を書いたとさえ言える。それではこのドラマはどのような既定のプラン、どのようなシナリオに添って展開するのだろうか。引用した『ジル』の一文が名指しする「陰謀」の主体は示唆的である。

ここで問題となるのは、ベギーに関するドリュの言述と対独協力思想、就中フランスファシズムの構成要素である反ユダヤ主義とがどう連関していたか、という点である。ナチがユダヤ人をはじめとする非アーリア人の差別と排除を国是としている以上、対独協力政策とは、枢軸国の戦争遂行に、占領費の支払いと、補償と交換に労働者をドイツに派遣することで間接的に協力することだけを意味しない。敗戦までの寛容主義的人種政策と市民感情を切り崩すことをも意味したのである。この政策転換は、ヴィシー政権成立当初から、そして米国人歴史家パクストン P.O. Paxton によればドイツに強制される以前に、以下の法的措置となって具体化した⁶⁵。ヴィシー政権は早くも1940年10月3日に、ユダヤ人が公務員、軍人、司法関係者として責任ある地位に就くこと、また、教員、新聞発行人および編集者、映画およびラジオ番組監督となるのを禁止した。翌4日には、知事に対し、外国籍のユダヤ人を特殊な集団収容施設に集めたり、居住指定を命じる権限を与えた。アルジェリアのユダヤ人に市民権を与えた1871年のクレミュー法は撤廃された。もちろん、これらの措置は必ずしも政権の反ユダヤ性を立証するものではない。逆に、前述の冷厳な審判者パクストンでさえ、ペタ

ン元帥を始めヴィシーの高官がナチの過激な人種差別に留保をつけようと腐心していた点を指摘している。しかし、北部の占領地域のドイツ当局はユダヤ人の企業と不動産を自由に「アーリア化」しており、それがローゼンベルグ機関と一部の財産強奪に手を染めたフランス人達の併存の下に、パトリック・モディアノが『夜警』la Ronde de nuit で描いたような悲惨を招いたのは否定できない。ドリュが占領地域で、協力政策のキーワードである「ヨーロッパ」を論じたエッセーの中で、ペギーに触れて「外部のフランス」をおとしめる時⁽⁶⁵⁾、外在性と同時生起する否定性が外国人嫌悪、必ずしも人種的でないにしても少なくとも国家主義的な外国人嫌悪を基礎としなくては正当化されないのは明白である。8月号の同誌上で「フランスには100万人のユダヤ人を含む400万人の外国人がいたので、君達よりずっと早く占領の痛みを感じていたのだ⁽⁶⁶⁾。」と彼が書くのを待つまでもなく、ドリュが対独協力のコンテクストに無意識にせよペギーを組み込んでるのが見てとれよう。前述の『ジル』の一節ではペギーは反ユダヤ主義者として提示されており、『我等の青春』のベルナル・コラザール弁護は無視されていた。たしかにこれは小説の観点からにすぎず、作者の人格と、反動的政治信条をはっきりと付与された主人公との干渉効果によるものである。とはいえ、ドリオの政党的同伴者の1938年から既に顕著な民族排外思想が⁽⁶⁶⁾、小説の執筆を通して内面化され、その結果、より洗練され、より体系化され、対独協力の選択を合理的に行なわせるに足る思想を形成したことは興味深い。ともあれ、反ユダヤ主義およびノルマンディー出身を誇りに感じていたドリュに1928年から見られる⁽⁶⁶⁾「北欧中心思想」nordisme は対独協力の推移に伴い彼をさらに遠くまで連れてゆく。即ち1943年、彼はドイツの雑誌に文章を寄せ、ゴビノー Gobineau、ペギー、クローデルらの作家を挙げて「北欧の地霊」génie septentrional de l'Europe を立証しようとするのである⁽⁶⁷⁾。

このように、第二次大戦前夜の小説から「奇妙な戦争」時に執筆されたエッセーを経て、占領初期の『新フランス評論』誌に至る、ドリュのペギーに関する言述は、対独協力の深化と伴に、「国民革命」版道徳哲学を越え、ファシズムが彼に提供する神話性および彼がドイツ軍の占領に先立って文芸エッセーとして表現したもののうちに次第にその解説格子を得る。前述のベタンの言述とレジスタンス的言述の交錯に絡めて言えば、彼は遅くとも1941年8月にはパリのファシストの典型的態度を我物としていたのである。つまりブラジャックがそうしたように詩人の風土を評価し、セリーヌがそうしたように『半月手帖』誌主幹が憎しみを徹底させなかった点に不満だったのである⁽⁷⁾。1940年前半に集中的にペギーに言及してから、ドリュは公には殆どペギーを論じなくなる。パリのファシストは1940年代の「ペギー主義」を構成しないので、ドリュのペギーに関する言述は短命に終わった。だが短命とはいえ、それはペギー主義的問題系をフランスファシズムに誘導する点で、1940年代の「ペギー主義」に三番目の次元を与えていた。もっともドリュ本人には有効でもキリスト教民主主義者 démocrates-chrétiens には民族主義的反ユダヤ主義ゆえに無効な誘導ではあったのであ

註

- (1) 1910年出版当時に、バレス、モラスら反ユダヤ主義右翼が『ジャンヌダルクの慈愛の神秘』の著者をいかに回収しようとし、『我等の青春』がどう答えたかは、Nelly Jussem-Wilson “L’Affaire Jeanne d’Arc et l’Affaire Dreyfus: Péguy et 《Notre jeunesse》” in *Revue d’Histoire Littéraire de la France*, 1962, pp.400-415. を参照。また『我等の青春』最終ページでベギーが自身を託したとされる新進批評家アルノー M. Arnaud および N. R. F. の作家達の反応については、前記論文と主旨を同じくする、Auguste Anglès, *André Gide et le premier groupe de la Nouvelle Revue Française*, Gallimard, t.1, 1978, pp.343-345.
- (2) ベギーのテキストは1909年までのものはプレイヤッド新版 (Œuvres en prose complètes, I, 1987; II, 1988) を『我等の青春』等1910年以降は旧版 (1961年版) を使用した。『我等の青春』については、《イデア叢書》文庫版の該当ページも漢用数字で併記した。O.C. (1961) II, p.518; 三一頁。
- (3) *ibid.* 最初の「神秘」の定詞詞 la と「政治」の前の部分冠詞 de la は原文イタリック。
- (4) ドレフュス事件に関してベギーが政治不信を表明したのは1903年にさかのぼる。『半月手帖』IV-20 (1903年6月16日) の長文の「議會政治再来」では、ジョレス主導のドレフュス権利回復運動再熱にこう記す。「まさにドレフュス事件とドレフュス主義 dreyfusisme は政治を糾弾したと言える。逆に政治はドレフュス事件とドレフュス主義への糾弾だったのだ。ドレフュス主義と政治の間には完全かつ本質的な両立不可能性があった。」O.C. (1987) I, p.1178 さらに「フランスドレフュス主義の解体の歴史」執筆プランが示される。 *ibid.* p.1194 しかしてこの時点で「ミスティック」の側面の論究は見られない。
- (5) Grevisse, *le Bon Usage*, Duculot, 10^e ed. 1975, §328.
- (6) ジョレスらドレフュス派の躍進した1902年選挙運動中、ベギーは例えば『半月手帖』III-14 (1902年4月22日) にこう記す。「選挙という名の売春はまさに、かつての慈愛の墮落したものだ。」O.C. (1987) I, p.939.
- (7) ベギーの死後13年、1927年暮のエピソードとして『ヌーヴェル・リテレル』誌編集長モーリス・マルタン・デュ・ガールはジュリアン・バンダがベギーとタロー兄弟の仲違いを目撃したと伝えている。錯乱した風のベギーがバンダに言う。「タローが出てったよ。『手帖』が先行かないんで店をたたんで教職に就くつもりだと言ったら何て答えたと思う。教職だって、君が何を教えると言

うんだ、とこうだ。」Maurice Martin du Gard, *les Mémorables*, t. 2
Flammariq, p.267.

- (8) Gustave Hervé (1871-1944) 歴史教師、後にジャーナリスト。軍を嘲弄する才は群を抜いていたが第一次大戦を機に熱烈な愛国主義者に転進。ベギーによれば反ドレフュス派も自分達も「軍への背信は怪物的犯罪」で一致しており、ただドレフュスの無罪か否かを争っていた。「反ドレフュス派と我々ドレフュス派は同じ言語を話していた。我々は全く同じ愛國主義的言語を話していた。」(傍点引用者) O.C. (1961) I. p.607; 百七六頁 ベギーにおいて、軍を支柱とする愛国主義は、事件の賭金になっていない。
- (9) O.C. (1961) II. p.587; 百四四頁。
- (10) *ibid.* p.73; 七三頁。
- (11) Bernard-Lazare (1865-1903) 仏人ジャーナリスト。先駆的ドレフュス派だった他、1897年8月の第一回シオニスト大会に出席した。
- (12) 「労働者インターナショナル、フランス支部」略称。同党は、ロシア革命に呼応する共産党の分離独立を経て、1936年人民戦線内閣を樹立する。
- (13) O.C. (1961) p.600; 百六五頁。
- (14) *ibid.* p.598; 百六一頁。
- (15) *ibid.* p.597; 百六十頁。
- (16) 註(1)参照。
- (17) 『マルセル、調和の理想郷の第一の対話』が、定理系を思わせる非時間的な現在形叙述と、対話というよりポリフォニーの形式で確信の深さを伝えている。O.C. (1987) I. pp.55-117.
- (18) E. Mounier, *Œuvres de Mounier*, I. 1931-1939, seuil, 1961, p.81.
- (19) この全集の出版経緯はリプリント版の、J.バステイエールの序文に詳しい。
Péguy, Œuvres complètes, Genève, Slatkine reprint, 1974, t.1. pp.1-15.
- (20) M. Raimond, *la Crise du roman*, José corti, 4^e éd. 1985, pp.19-21.
- (21) *le Roman à thèse ou l'autorité fictive*, PUF. 1987, の著者シュレイマンはニザンの文芸評論を選んで出版した。*Pour une nouvelle culture*, Grasset, 1971.
- (22) 1926年9月のブルトンのパンフレット「正当防衛」*Légitime défense* は共産党機関誌『ユマニテ』文芸主幹バルピュス Barbusse と彼との詩的創造に関する意見の相違を示すとともに、シュルレアリスムを革命のコンテクストに開いている。当時の共産党の文芸政策とシュルレアリストの関係は、Jean - Pierre Morel, *Le Roman insupportable l'internationale littéraire et la France(1920-1932)*, Gallimard, 1985, pp.100-119 を参照。
- (23) J.-L. Loubet del Bayle, *Les non-conformistes des années 30 Une tentative de renouvellement de la pensée politique française*, Seuil,

1969. 第2版が結論に手を入れ出版された。引用は旧版による。p.324.
- (24) 2月6日事件の参考文献として、長谷川公昭『ファシスト群像』中公新書、pp.32-37. 中木康夫『フランス政治史(中)』未来社、1975, pp.63-67. 木下半治『フランス・ナショナリズム史(二)』国書刊行会、1976, pp.1-15 等がある。事件を契機に人民戦線の萌芽が生じ、他方社共内改革派脱党者が新党を組織し、小論の扱う知識人も含む多くの若者の運動を吸収した。
- (25) 「若い右翼」の核はシャルル・モラスの影響下に精神形成した。1926年末のアクション・フランセーズ運動のローマ教会による破門の後、独自の右翼運動の理念を求めて1924年から36年かけ相續ぎ雑誌を創刊した。『ガゼット・フランセーズ』『カイエ』『レアクション』『コンパ』等。彼等の運動は以下の二者から区別すべきである。モラス派から、より大衆的でファシスト的な運動に移行した1925年のヴァロワのフェーソー運動、および常にモラスに忠実だったブラジャックと『ジュ・スイ・バルトウ』誌(1930-1944)のメンバーである。
- (26) R. Aron, A. Dandieu, *Décadence de la Nation française*, Riéder, 1931. 『新秩序』誌同人の思想来歴は多岐にわたる。Louhet del Bayle op. cit. pp.81-104. ベギーへの言及が明瞭なのは後述するダニエル・ロップス。
- (27) もちろん『エスプリ』誌は共同で創刊された上、各メンバーの傾向の差異は、M. Winock, *Histoire politique de la revue "Esprit" 1930-1950*, Seuil, 1975, pp.42-48 に詳しい。
- (28) Mounier, *Œuvres*, t.1. pp.89-90.
- (29) loc. cit.
- (30) Loubet del Bayle, op. cit. p.244. ムニエの言葉が正当にもベギーの *Argument suite* (1913) の「万人がブルジョワだ」と結びつけられている。Péguy, O.C. (1961) II, p.1103.
- (31) 河野健三編京都大学人文科学研究所報告『ヨーロッパ1930年代』岩波書店、1980年、所収の西川長夫論文「1930年代精神」と文学 ドリュ・ラ・ロッシェルを中心に」参照。p.27-28.
- (32) Nizan, "Les conséquences du refus" in N. R. F. déc. 1932. p.810.
- (33) Nizan, op. cit.
- (34) この見地からは Z. Sternhell, *Ni droite ni gauche l'idéologie fasciste en France*, Seuil, 1983. 第7章参照。ベルナル・アンリ・レヴィのマルクス著作の標題を意識したパンフレット『フランス・イデオロギー』*L'Idéologie française*, Grasset, 1981, はベギーから『エスプリ』誌を経由して対独協力ベタン政権に至るラインをも、フランスファシズムの一系譜と見ている。
- (35) Charles, vicomte de Foucauld (1858-1916) 探険家にして宣教師の彼は

士官時代、ユダヤ教のラビに扮しモロッコに2千kmの道を開く。1901年、司祭に叙せられサハラ砂漠で隠者的宣教師となる。回教徒遊牧民トゥアレグ族の言語と文学に関する著作および宗教的著作がある。

- (36) Loubet del Bayle, op. cit. p.246.
- (37) 雑誌準備段階での葛藤は Winock, op. cit. pp.57-67 参照。
- (38) 第三共和国憲法は1875年になって採択されたのであり、1877年のマクマオン元帥による巻き返し（5月16日事件）が共和国を危機に陥れた点に留意すべき。
- (39) Simone Fraisse, *Péguy*, Seuil, coll. "écrivains de toujours," 1979, p.25.
- (40) Mounier, *Œuvres*, t. 1. p.59, et passim.
- (41) *ibid.* p.63.
- (42) 『我等の青春』に拡張主義ナショナリズムの萌芽を探すとすれば「[我等の社会主義は] 諸国家と諸民族を凌辱し抹消するのではなく [……] 逆にある置換。ある有機的な諸民族の閉域とその無秩序な競合を健全な森に替えようと努めていた。それは有望な諸民族から成る、拡大する森であり、花咲ける民族から成る民族の総体なのだ。」O.C. (1961) II, pp.600-601; 百六五-六頁。植物の比喻は生成と均質性を表現するとともに、北方民族中心的な起源神話と無関係ではありえない。
- (43) 「黄金伝説」への最近の政治思想的接近は、Raoul Girardet, *Mythes et mythologies politiques*, Seuil, 1986.
- (44) Jacques Doriot (1898-1945) 参考文献として D. ヴォルフ著、平瀬徹也・吉田八重子訳『フランスファシズムの生成 人民戦線とドリオ運動』風媒社、1972年がある。ドリユと、両次大戦間のドリオとの関係は P.Andreu, F.Grover, *Drieu la Rochelle*, Hachette, 1979, pp.351-398 を参照。ドリオのフランス人民党機関誌『エマンシパシオン・ナショナル』に掲載された記事の大部分は Drieu la Rochelle, *Avec Doriot*, Gallimard, 1937 および *id. Chronique politique 1937-1942* Gallimard, 1943 に収められている。
- (45) 1925年から27年にかけてのドリユの文学観と政治観を知る貴重な資料がフレデリック・ルフェーブルのインタビュー（1926年1月2日付）である。F. Lefèvre *Une heure avec*, 4^e série, Gallimard, 1927. ドリユはバレスとダヌンチオに「完全な人間という強迫観念」と「直接行動への誘惑」を否定的に認めつつ（同書 p.81）他方で「僕は剣を感じていたい。」（p.85）と述懐する。剣の性的意味に注意するなら、ドリユの最初の小説『女達に覆われた男』の主人公 Gille から1934年の短編集『欺かれた男の日記』の語り手 = 主人公 Gille に至るまで、剣を失うこと、つまり性的フィアスコと倒錯への生々しい不安が彼等をやみくもな行動（誘惑）に駆りたてていたのが想起される。ド

リュにあって行動主義は性の不安定さに深く根ざしており、虚構作品がそれを表現し得ていた。だが2月6日事件以後、ドリュは行動主義をフランスのファシスト的[・]な革命への合目的性において語りがちになる。

- (46) “Barrès, comme nous, voulait fondre toutes les traditions françaises” in *Chronique politique*, pp.89-91.
- (47) 彼にはナチ親衛隊員に述べた、愚かしくも恐るべき一言がある。「私は君より古くからの反ユダヤ主義者だ。その点、君の父親と言えよう。」R.O.Paxton, *la France de Vichy 1940-1944*, Seuil, coll. “Points”, 1973, p.175.
- (48) Winock, op. cit. pp.227-228.
- (49) 1940年7月、デュノワイエ・ド・スゴンザック大尉がゲルノーブル近辺に創立したこの学校は、ヴィシーの青年団体幹部、後には希望者を数週間預った。ルーベ・デル・ペイルによればブルドンとペギーを精神的師と仰ぎ、1941年末から講師、受講生ともレジスタンスに向かい、42年末、ラヴァル首相は学校を閉鎖、関係者は地下組織に合流する。op. cit. pp.412-414. エルヌのペギー特集にはユベール・ブーブニメリが1941年初めから講じたというペギー論のテクストが収録され、独ソ開戦前後の微妙な情勢下、「調和の理想郷」と共産主義の親近性が語られる。Cahier de l’Herne, 1977, pp.309-321.
- (50) J.Bastiaire, “Péguy inspirateur de la Résistance”, in “Cahier de l’Herne”, 1977, pp.300-308.
- (51) ibid. p.303.
- (52) ibid. p.300 ベリ Gabriel Péri (1902-1941) はドイツ当局に銃殺された共産党員。
- (53) 原文は1906年から翌年にかけて『半月手帖』に掲載された。全集版では第三巻(1927年刊)。
- (54) “Repères” in N.R.F. janvier 1941, pp.200-207.
- (55) ドリュはシュールレアリスト達からこの点を批判された事がある。Drieu la Rochelle, “Troisième lettre aux surréalistes” in *Derniers Jours*, 7^e cahier, 1927, pp.2-3.
- (56) J.Lansard, *Drieu la Rochelle ou la passion tragique de l’Unité Essai sur son théâtre joué et inédit*, Aux amateurs de livres, t. 2, 1988, p.237-238.
- (57) 註54の短文中でドリュは「教会博士」としてエロー Ernest Hello, ハルベイ・ドルヴィイ、プロワ、ヴェルレーヌ、クローデルを挙げ、ネルヴァル、ボードレール、ランボー、リラダンを加えて彼のいわゆる「象徴主義」作家とし、その影響下にヴァレリー、ジッド、バレスおよびモラスを数える。
- (58) *Notes pour comprendre le siècle*, Gallimard, 1941.

- (59) ドリュの表現を借りるなら、ペギーは「頹廢の両翼に立ちはだかり、共和国と教会の双方を駈入らせた、偉大なカトリック教徒にして共和主義者」(p.205)であり「幻視の高みから降りて現実界を監視し探索した(中略)偉大なる批判者にして幻視者」(p.206)となる。
- (60) 例えば次の箇所共通点が見られる。「フランスにはパスカル以来レオン・ブロワまでキリスト教徒は存在しなかったと言えよう。特に教会にはいなかった、と。」Drieu, *Notes*, p.120.
- (61) Drieu la Rochelle, "Mes premiers écrits....." in *Sur les écrivains, Essais critiques réunis et annotés par F. Grover*, Gallimard, 1964, pp. 173-180.
- (62) *ibid.* p.175.
- (63) Drieu la Rochelle, *Écrits de jeunesse, 1917-1927*, Gallimard, 1941, p.9.
- (64) *Gilles*, Gallimard, coll. "Folio", 1942年完全版を定本。p.607. 訳文は若林真訳『ジル(下)』国書刊行会、1987年、を使わせていただいた。
- (65) Paxton, *op. cit.*, p.172.
- (66) N. R. F. jan. 1941, p.205.
- (67) "A certains" in N. R. F. août 1941, p.200.
- (68) Andreu, Grover, *op. cit.* pp.395-397.
- (69) "L'Ode aux voiles du Nord", préface pour le livre de J.-L. Marois, Henri Jonquères, s. d. 1928.
- (70) "France, Angleterre, Allemagne", in *Français d'Europe*, Edition Balzac, 1944, pp.399-425. この出版社は「アéria化」されたカルマンレヴィ社。
- (71) R. Brasillach, *les Quatre jeudis, les Sept Couleurs*, 1944. この本は1930年以来の評論をまとめたもので、ペギー関係の5本の記事を収める。シリーズはペギーが「何ひとつ判っちゃいない」と1941年に記す。P. Ory, *les Col-laborateurs 1940-1945*, seuil, coll, "Points", 1967, p.233.